

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第133号

イザヤ 65:1

平成18年10月27日

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おどきの貧乏人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行つてやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」

ルカ16:19-31

旧、新約の時代、神の預言者たちが聖霊に導かれ、霊の領域を垣間見、神の啓示を受け聖書の預言書を記したように、米国のクリスチャン、マリー・バックスターは霊の領域で悪魔、墮天使の命令の下、悪霊がどんなにせわしく働いているかを垣間見ることが許されました。肉眼で見えない霊の世界を理解することは難しいのですが、今日、イエスが上述のたとえを語られた二千年前よりもはるかに裁きの日が近づいていることは否めません。以下、'A Divine Revelation of the Spirit Realm' (Whitaker House, 2000) からの抜粋と意識でマリーの体験をご紹介しますことにより少しでも多くの方々に、主が何を語っておられるのかを理解し、正しい道の選択をしていただきたいと思います。読者の中にはあるいは、マリーとよく似た体験をされた方がおられるかもしれません。今、神は色々な形でご自身を顕しておられるようです。正しい信仰の選択に“明日”はありません。悔い改めて、イエス・キリストを受け入れ、新生の人生を今歩み始めてください。信仰の自由が認められ、聖書を自由に手に取って読むことが許されている日本ではすでに、キリストの福音は十分普及しているのです。ある日突然、死んで神の裁きの座に立たされたとき、「知らなかった」と言い訳することはできないでしょう。

次のマリーの体験は冒頭に引用したイエスのたとえを鮮明に思い起こさせるものです。

暗い穴にひざまずいていた女性は炎に包まれた衣服から骨が突き出、すけて穴だらけの骨格に、髪がなく目と鼻の位置には大きな洞のある頭骸骨の状態（ほら、かえん）で、火炎を振り払い振り払い硫黄の穴から這い出ようともがいていた。焼けただれた肉片が痛々しくぶら下がった体をむち打って彼女は「主よ。主よ。出してください!」と叫んでいた。やがてやっと穴の一番上に達した彼女は足で立ち上がり、這い出さんばかり、と私は思った。が、次の瞬間、大きな悪霊が襲って来て彼女を情け容赦なく火の燃え盛る穴の底へ突き落としてしまった。茶がかった黒色のその化け物のような悪霊には翼があり、体中に毛が生え、左右の翼の先は両方とも損なわれ、両脇にぶら下がっているかのようなようであった。その様は、突き出した眉間から深く奥まったところに目があり、巨大な“灰色熊”のようであった。彼女が落ちて行くのを目の当たりにするのは、恐怖であった。ただ彼女を救ってあげたいという私の思いが伝わったのか、イエスは言われた。「彼女はすでに裁かれている。神が言われたからだ。彼女が幼いときから、わたしは悔い改めを促し、わたしに仕えるようにと招いた。彼女は聞かなかった。彼女はいつも『いつか、そうします。でも今は暇がない。そう、多分明日...』』と言いつつ。でも明日はなかった。」と。その女性はイエスを仰ぎ、イエスに触れんばかりに、「おお、主よ。あなたの御言葉に従ってさえたなら... 私の美しさ、お金をサタンは利用した。サタンの言うなりになっているときも主は確かに、私を引き続き招いてくださった。でもまだ明日があると思っていたのに... 事故に遭い私は即死だった。おお主よ。出してください!」と泣き崩れていた。しかし、イエスはただ彼女がすでに裁かれていると語られただけであった。

クリスチャンホームで育ち、善悪を正しく教えられ、よく教育され、しつけられていたある高校生が時

勢に流され、あまり深刻に考えもしないで最近放縦にふけるようになっていました。そのようなとき、「ほえたけるしのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っている」悪魔は機を逃さず、神の民を墮落させるため近づいてきます。この世でごく普通の営みをしてきた者が道を踏み外し始めると、如何にすばやく悪が忍び寄り、神から引き離そうとするか、また、悪霊から解放されるには神を求める以外にないことをマリーは次のように目撃しました。

彼は自分の部屋で不敬虔な音楽を聴きながら、面白半分にカルト的な儀式をやっていた。ベットに横たわり、とどろくようなビートのひどい音楽に身を震わせ、リズムにあわせ酔い心地の中で、ふと見上げると悪霊が部屋に飛び込んできたところであった。彼が悪霊を見たのは一瞬のことであったが、急に寒気に襲われ、恐怖が背筋を走った。少年はとっさにラジオを消し、毛布をつかんだ。悪霊は壁にかかっていたイエス像をたたき落とし、すかさずラジオをつくと、部屋中を乱暴に荒らし始めた。少年は、何か邪悪な、異様なものの存在を感じることはできたが、悪霊を見ることはできなかった。たちまち部屋には濃霧のように恐怖が立ち込めて、少年は身動きできず、息苦しくなった。「だれだ?」震えながら少年は声を絞り出した。しかし、心のどこかでそれが悪霊であることは分かっていた。次の瞬間、彼は神に向かって叫んでいた。絶望から彼が神の助けを求めたとき、音楽は自然に消え、直ちに部屋の空気も晴れ、元通りになった。程なくして少年の部屋の異様な物音に気付いた両親がやってきて、少年が必死に主に祈っているのを見、両親も加わった。三人が一緒に祈っているとき、彼は剣を持った大きな御使いが悪霊を追い払っているのを見ることができた。彼は解放の喜びに、ただただ主に感謝したのであった。このようにして少年はこれ以上悪霊の虜になることから救われた。

引き続き、「何ということだ。もう希望はない、何も無い!」と途切れることなく叫び続ける悔恨の悲痛な声にマリーは絶望的な気持ちに襲われましたが、それは一つの棺からの叫びでした。棺のあるところに導かれたマリーは中を覗きます。灰色がかった汚れたもやが立ち込めた棺の中には、人の魂が横たわり、悪霊どもが槍で、その男性を棺の中へと押し込んでいました。そのように苦しんでいる魂を見るに忍びなく、マリーはイエスに懇願したのでした。「彼を出してあげてください。主よ。出してあげて!」しかし、イエスは次のように答えられたのです。

「娘よ。安かれ。この男性は神の言葉を取り次ぐ宣教師であった。彼が全身全霊でわたしに仕え、なるほど多くの人たちを救いへと導いた時期もあった。彼を通して救われた者たちの多くは今もわたしに仕えている。しかし肉欲と富の欺瞞がサタンへの道を開くことになった。彼は大きな教会、高級車、高収入を謳歌し、教会の献金を横領するようになった。次第に真理に偽りを混ぜた説教、嘘も教えるようになった。悔い改めて真理を語るようにと何度もわたしは彼にチャンスを与えたが、神より、この世の楽しみを愛した彼はわたしの警告を聞き入れなかった。彼は、聖書に啓示されている真理以外の教理を教えることや宣教することが間違っていること、してはいけないことであるのを知っていた。死ぬ直前彼は、聖霊のバプテスマは嘘である、聖霊に導かれていると主張する者たちは偽善者であると言い切った。また、酔酩、放縦等、この世に溺れても悔い改めることはない。天国に行けるとも言い切った。神は憐れみの神であるから、だれも地獄に送るようなことはしないと教え、多くの正しい者たちを墮落させ、主の恵みからはずれさせた。このような偽りの教理を教え、わたしの聖なる言葉を踏みじり、自分は神のようであるとも豪語した。それでも、わたしは彼を愛し続けた。わたしの娘よ。わたしを知ってから、背を向けて従わないより、わたしを一切知らなかったほうがましだということを銘記しなさい。何度呼びかけても、彼はわたしに耳を貸そうとしなかった。この世の楽な人生を選んだからだ。死んで彼は今、サタンの責め苦しみに苦しんでいる。かつてわたしの言葉を広め、救われた魂をわたしの国に送ったのだから、サタンが“かたき”にするのも当然だろう。」

マリーの嘆願も空しく、黒衣、黒頭巾に身を包んだ身の丈一メートルほどの悪霊たちが入れ代わり立ち代わりやって来てはその男性を苦しめ、その間にも彼の脈打つ心臓から鮮血がほとばしり出ている様は、すさまじい地獄の光景でした。

冒頭に引用した『ラザロと金持ちのたとえ』に明確に示されているように、人間の死後の行く先は『神と共なる場所(アブラハムのふところ)』か『神不在の苦しみの場所(ハデス)』の二者択一で、現世の命のある間にイエス・キリストを受け入れるか否かを自分自身が選択することによって例外なく死後の行く先が決定します。イエスはこのことを「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでに裁かれている」(ヨハネ 3: 18、下線付加)と表現されました。キリストの救いを受け入れないで死んだ者、すなわち、“失われた者”が死後「ハデス」と呼ばれる暗闇でどんなに痛恨の思いに嘆き悲しまなければならぬかを知ったなら、だれも今、その結末に至る道を選択しないでしょう。二つの行く先が大きな淵で完全に隔離されているというこのたとえの描写は、選択の結末を知らされた上でなおかつキリストを拒む道を選ぶなら、死後どんなに後悔しても二度と選択し直す機会はないということです。死後不本意な状態に置かれたとしても、その道を選んだ自分が全責任を取ることであって、主が無慈悲というのではないのです。イエスは、人々が決して“滅びの道”、すなわち、究極的に“悪魔自身に定められている行く先”を選択することがないように、今真の神を選択しなさいと語られたのでした。神のご計画はすでにすべて「聖書」(モーセと預言者)に記されているので、聖書が証している神のひとり子キリストによる救いを受け入れ、神の御旨を行なうことは、神からの新しい啓示や超自然的な神のわざを見なくても、今だれにでもできる信仰の選択なのです。マリーの手記を通して、霊域ではキリストの再臨を恐れる暗闇の指導者たちが主の民を墮落させるために必死になって働いていることが実感として伝わってきたのではないのでしょうか。しかし、私たちが神の言葉に従順であることによって、主キリストとの正しい関係をしっかり保っていれば、聖霊の助けによって悪魔の攻撃に勝利していくことができるのです。